古今祓彙考

二

ロ 7
3222
2

門 八 4
號 33
巻 2

古今妖魅考二之巻

平篤胤輯考

門人　山城國　江戸爲之
　　　常陸國　竹來道彦　同校
　　　武蔵國　森田昌成

上件記されたる外に。猶ほ數(アマタ)の僧名を擧(アゲ)られたれど。其(ソ)は姑(シバラ)く置(オキ)て。早く寶物集にも。慈恵僧正の行業の高かりしも。延暦寺に執を止(トヾ)めて。金色の天狗と成れりと見え。

此僧の行業の高かりし事ども。諸書に見えたる中に。今鏡九巻。また十訓抄などに。大内にて五壇の御修法勤(ツトメ)られけるに。慈恵は不動尊となり。寛朝を降三世と現じて。少(スコシ)も本

門 ロ 7
號 3222
巻 2

尊に替らざりけり。圓融院正しく此事を御覽ぜられけるに
と見え。はさ著聞集。十訓抄などに。雅縁阿闍梨といふ人。慈
恵僧正を。濫行肉食の人なる由云けるに。慈恵深く憤りて。
三寶に祈りしかば。雅縁阿闍梨三塔を走り回りて。淨行持
律の人に。空言を申さるる報とて。狂ひ歩行けるとも有り。
下に擧る雲景が未來記に。愛宕山に集ひて。世を亂さむと計
れる釋魔の中に。此僧も交りて在り。其は我慢勝他の宿執を
引きて成れるなと。祇園を天台の末寺と成さる一事を以て
も辨ふべし。
祇園を天台の末寺とせる事は。今昔物語集に。祇園はもと

山階寺の末寺にて有けるに。比叡山の末寺と成れり。其故
は。比叡山の末寺に。蓮花寺といふ寺あり。然るに祇園の別
當に。良筭といふ僧有けり。勢徳ありて世間叶へる僧なり。
彼蓮花寺の堂の前に。紅葉の有けるが。十月の比。色の微妙
ければ。良筭是を折取りて遣けるを。蓮花寺の住僧制して云
く。祇園の別當は。徳人にて坐せども。何でか天台末寺の内な
る木をば。心に任せて按内もなく折らるべきぞ。極まる非
常の事なりと。良筭が使かく制せられて。折らで返りて。此
なむ云へば。良筭大きに嗔りて。此云ならば。其木を皆伐り
て來れと云て。從者共を出し立て遣ける。然るに蓮花寺の

住僧は定めて良算が従者を遣せて。此木をば伐せむずらむと悟りて。良算が従者共の来ざる前に。住僧みづから其紅葉の木を。根際より伐臥せてけり。然れば良算が使行て見るに。木を伐てければ。返りて良算に其由を云ければ。彌嗔りけり。此間横川の慈恵僧正。天台座主として。殿下の御修法して。法性寺に在けるに。蓮花寺の僧木を伐る由を。法性寺に急ぎ参りて。此由を座主に申ければ。其時座主も肩を並ぶる人無りければ。大きに嗔りて良算を召しに遣りけるに。良算我は山階寺の末寺の司なり。何の故ぞ天台座主。我を心に任せて召べきぞと放言して。参ざりければ。座主彌

嗔りて。山の所司を呼下して。其をもて祇園の神人ら代人等の。延暦寺に寄ける寄文を書儲けて。其に判を加へよと押責ければ。神人ら責られ侘て。判を加へてけり。其後座主今に於ては。祇園は天台山の末寺なり。早く別當良算を追却すべしと云て追せけるぞ。良算敢て事ともせず。□公正。平致頼といふ兵の郎等どもを雇ひ寄せて。楯を儲けて。軍を調へて待ける間に。座主此由を聞て彌く嗔りて。西塔の平南坊といふ處に住ける。睿荷と云ける僧は。極たる武藝第一の者なり。はた彼致頼が弟に。入禪といふ僧在けり。極たる兵なり。此二人を祇園に遣して。良算を追しむるに。此

二人彼處に至りて。良筭が儲くる軍兵に向て云く。汝ら濫に箭を放ちて悪事を致さば。後の爲に悪かりなむと誘けるに。良筭が雇へる致頼が郎等ども。入禪を見て。早う山の禪師殿の御坐るにこそ有りけれと云て。後の山に逃去にければ。心に任せて。良筭を追却してけり。然ど睿荷を別當に成して執行させけるに。其後山階寺は大衆發りて。公家に訴へ申にやう。祇園は往古より山階寺の末寺なり。何でう恣に延曆寺に押取られむ。速に本の如く。山階寺の末寺と爲べき由を仰下さるべしと。度々訴申ける程に。御裁許は遲くありければ。山階寺は若き大衆京上して。勸學院に著けり。公聞食し驚きて。御沙汰有べかりけるに。其前に彼座主慈恵僧正失せにけり。然て其沙汰明日有べしと既に仰下されけるに。山階寺の大衆は。皆勸學院に在りけるに。其寺は中筭は。宗と此事を沙汰すべき者にて有けるに。勸學院近き小家に宿りて居たりけるに。其夕さり方。前に弟子共など數居たるを。俄に中筭只今此に人來らむとす。某達しばらく外に出よと云ければ。弟子共みな去ける程に。人外より入來るとも見えぬに。中筭人と物語ける音の聞えければ。弟子ども怪と思ける程に。暫許ありて。中筭弟子どもを呼ければ。皆出來りけるに。中筭此に山の慈恵僧正は御たり

起ると云ければ。弟子ども此を聞て。此は何に宣ふ事ぞ。慈
恵僧正は早う失給ひし人をばと思けれども。怖くて物も云
はで止りけり。然て明る日此沙汰有けるに。中筭風發りた
りと云て。沙汰の庭に出ざりければ。山階寺の方に。指せる
由沙汰する人無りけるに依て。其御裁許切ざりければ。大
衆ども返下などして。遂に祇園は。比叡山の末寺に成畢た
る也けり。由なき良筭が悪事より發る事なれども。此を思
ふに。慈恵僧正の強く執せる事にこそ有ぬらめ。失給ひけれ
ども。其霊の中筭に乞請ければ。中筭は俄に風發りたりとて。
出ざりけるにこそ。中筭出て沙汰せましかば。何かは有ま

し。然れば其我知て。慈恵僧正の霊も。行て乞請たるにこそ。
中筭は只今には非ざりけりと。弟子共も此を聞く人も。皆
知にけりと有り。
陸奥國の女が。法華經を知らで歎けるなり。良源の白骨の頭の
舌ばかり活たるが。女の家の天井に來りて教たるも。我執の
魔事なり。
そは西行法師が撰集抄に。陸奥國平泉郡捌といふ里に。坂
芝山と云山あり。其邊の河端に。高さ一丈餘なる石塔を立
たり。針貫しまはし。草拂などしたり。此は何なる事にかと
尋ぬれば。中ごろ此里に猛將あり。其女なる者。法華經を讀

多けれど。教ふべき者なしとて。朝夕歎きて過けるに。或時天井の上に聲ありて云ふやう。汝經を求めて前におけ。我此に居て教へむと聞ゆ。怪く思ひながら。經を得て前に置けるを。天井の上にて。ゆかしき聲にて教へけり。八日と云にみな習終りぬ。此女いかなる態ならむと。最怪しく覺えて。天井を見處に。白く朽たる苔生たる首に。舌の活たる人の如くなる有り。此白骨の教へし處にこそと思驚きて。此は誰にてか御らむと。強て尋ぬるとき。我はこれ延暦寺の昔の住侶。慈恵大師の首なり。汝が志を感じて來て教たり。急ぎ我を坂芝山に送れと有りければ。哀に忝きことに覺えて。泣く此山に納めて。此の如く塔婆などせるが。此頃までも山中に。貴き御經の音する折も侍り。さて此女は尼になりて。此山中に菴を結びて。思ひにまして在しが。此二十餘年さきに往生したり。其菴の形今に有り見よと云ふ。彼人と伴ひて見るに。口三間なる庵屋の形ばかり殘けりと有り。

此も良源法師のみならず。和漢の法師に。舌のみ死せずて。經を讀誦したる處類もいと多かれど。一切法に著せるを。法智魔と謂ふもある魔事なる物ぞや。序に此方に此事の有し哉尚記さば。古今著聞集の宿執篇に。壹睿といふ僧有けり。多年法花經に帰して修しける處間。紀伊國宍背山に至りて宿しける

夜に。其人を見ずして。法花經をよむ聲聞えけり。一部讀終りて經の聲止ぬ。怪く思て。朝に其程を見るに。年序經たる白骨あり。更に分散せずして。正體これ續きたり。其髑髏の中に舌あり。壹睿髑髏に向ひて。其因縁を尋ぬれば。舌答へて云く。我はこれ叡山の僧。名をは圓善と云ひき。修行の間此山に至りて夭亡し。前生に法華經六万部讀奉らむと願を起して。生分を既に終りになり。計らざるに生を隔つと云へども。其願を誦滿せむが為に。猶誦するなり。今年已に讀終りて。正に兜率の内院に生ずべしと云ひけり。壹睿此事を聞て。禮拜して去にけり。此の如き例多し。霊異記にも。熊野山。金峰山などに。誦經せ

髑髏有ける由見えたり。此等みな執の深き至りなりと見ゆ。信に霊異記に。阿部天皇の御世に。紀伊國牟婁郡熊野村に。永興禪師といふ僧有けり。人其行を美めて。都より南なる國の人故に。南菩薩と稱ひき。此が許に來て仕へける僧の。山に入て行せむと云ひて。麻縄二十尋。水瓶一口を持て別去ぬ。二年を過て熊野村の人。熊野河上の山に至りて。樹を伐りて船を作りけるに聞ければ法花經を讀音あり。月日を累ぬるに猶止まず。貴く覺えて山深く尋ぬるに見えず。還りて永興師に云ければ。師怪みて往て聞くに聲あり。尋求めて見ればニツの屍骨あり。麻縄をもて二足を繫ぎ。巖に懸り身を投

て死けり。其傍に水瓶あり。此をもて別去れる僧なる事を知り。悲哭して還る。三年を逕て山人告云く。讀經の音今に止まずと。幷また往て其骨を取らむと將て。髑髏を見れば。三年に至りて其舌腐ず菀然として生有けり。また吉野金峰山に一禪師あり。峰に行て行道するに。往前に法花經金剛般若經を讀む音あり。草中を排開き見れば。一ッの髑髏あり。久しく歷て日に曝さるに。其舌爛れずして生著て有り。禪師是を淨處に取收めて。草を以て其上を葺覆ひ。共に經を讀て六時に行道し。禪師が法花經を讀むに從ひ。共に讀む故に。其舌を見れば。舌振動すと有り。此ノ永興禪師が事は。今昔物語集にも見えけり。そは靈異記を取れるなるべし。猶言はゞ。今昔物語集に。春朝持經者顯經驗語とある條に。今昔春朝と云ふ持經者有けり。日夜に法花經を讀誦して。棲を不定して所々に流浪して。只法華經を讀誦し。心に人を哀みて。人の苦む事を見ては。我が苦と思ひ。人の喜ぶ事を見ては。我が樂と思ふ。然る間。春朝遂に行き宿る棲无くして。一條の馬出の舍の下にして死けり。髑髏も其邊に有て取り棄る人无し。其後その渡の人夜聞くに。每夜に法華經を誦ける音有り。其邊の人等此を聞て。貴む事无限し。然れども誰人の誦するとも不知して。怪み思ふ間に。或聖人出來て。

此髑髏を取て。深き山に持行て置けり。其後此経を誦ける音絶ぬ。然れば其邉の人。此髑髏□□誦しけりと云事を知にけり。春朝上人をば。只人に非ず権者也。とぞ其時の人云けると有るは。甚よく類さる事共なりかし。

霊異記に。右の事を記せる末に。諒知大乗不思議力。誦経積功験徳也。賛曰。貴哉受血肉身常誦法華得大乗験投身曝骨而髑髏中著舌不爛。是聖不凡矣。と云へれども悉く釋魔に率られたる宿執の為に處にて。中にも両足を繋ぎて身を投たるは。謂ふが如く殊に炳き。大乗は忌々しき験なる事。是聖不凡と貴む事に云ひ思ふ。佛者の心ぞかし。異しき物は無りけり。

然るは西行法師が撰集抄にも。慈恵大師のゆき首れ。経誦さるゝ事を記せる末に。かゝる例ぞ有難く。かき闇さるゝ心地して。物も覚えねと書たり。此法師は。佛法の事とし云ずば。何とも無き事にも涙を落さ。元より泣頬る法師なれば。然も有べき事ぞ。此外の書共にも。かゝる事をば。いと貴げに記せるは。傍いたき事なり。然るに著聞集にのみ。此類ぞ宿執篇に記して。由なき事に思へる状なるは。見高き撰者なりけり。○序に言はむ。西行は法師の多かる中にも。歌作りなる故に。物の哀を知らざる顔して。撰集抄に記せる事どもを見れば。おかしく物も招き出むとせられたる拙き事を

し泣頰して記し。名聞宿執などの筋は。いさ淨よく失ひ畢
なる樣に云へども。宿執の心はいと深くぞ有ける。其は
著聞集に。是も宿執篇に西行法師出家より前は。徳大寺左
大臣の家人にて有けり。多年修行のゝち都へ帰りて。年ご
ろの主君にておはしけん睦しさに。公衡の中將の許へ尋ねて
伺ひ見れば。縹の白裡の狩衣に。おり物の奴袴踏くゝみて。
庭の櫻を詠めて。高欄に寄居たる狀いと優にて。徳大寺の
御跡は。此人に御けりと思ひて。左右なく櫻の本に立寄た
りければ。中將いかなる人にかと尋られけるに。西行と申す
者の參りて候と申されければ。年ごろ見參したかりけるほどに

殊に悦給ひて。椽の上に呼上せて。昔今の事語られける。日
やうやう暮にければ。西行は帰りぬ。其後常に參りて物語
しけり。かゝる程に。任大臣有べしと聞えけり。藏人頭に彼
中將の成べき仁に當り給ひけるに。院は中將成經朝臣を
成さむと思食し。殿下は大藏卿賴宗朝臣を推擧ありければ
ぬ。兩闕ともに叶ふまじげに聞えけるを。西行聞て。いそぎ
中將の許に詣で其由を語りて。人に越られ給ひなば。定め
て世を遁れ給はむずらむなど申けるに。中將聞て。誠にさ
こそ有けれども。母尼堂を立べき願有て。其間の事を申
付く。出家の身にて口入せむ事。勸化法師に似たらむぞれ

ば。其願とげて後に計ふべしと答へられければ西行心おとりして帰りぬ。任大臣のついでに聞えしが如く。成經朝臣藏人頭に補せられにけり。其朝西行弟子を中將の許へやりて。若やとて事がらを見せけるに。敢て日來に替る事無りければ。又ふみを持て。申候し事はいかにと尋ねければ。見参れとは委く申べしと返事せられければ。無下の人にて御ありけるとて。其後は向はず成にけり。世を遁れ身を捨たれども。心は昔にかはらず達くしく有けるなりと有り。聖人見はされども。五蘊六塵の宿執魔縁を去敢ざるとは。是をもて知るべし。

斯て上に擧たる四大師は更なり。叡山の中興と稱れし人すら。右に記す如く。憍慢宿執。名利勝他は魔念深有しかば。其末派門葉の僧徒は。魔縁を引ざるは。一人も有まじきこと。前に記せる道昭法師が霊の語に。天竺震旦本朝に名を得たる貴僧高僧は。魔道に落たる類は。勝て計ふべからずと言ひ。下に擧る開發源大夫住吉と名告れる鬼の語に。諸宗の宜しき法師は。皆天狗に成れる故なり。其數を知らず。大智の僧は大天狗となり。小智の僧は小天狗となり。無智の僧は畜生道に墮ぬ。六十餘州は山峰に。或は二三十人。或は五十百二百人。天狗の集らざる處なし。と言へるを思ひ合せて辨ふべし。

ちの開發源大夫住吉といふ物の語は。第四巻にそれ全文
を引て論ふを見るべし。
抑大智は僧の大釋魔と成り。小智は僧の小釋魔と成て。人を
誑惑し。世を騷亂せしむる事は。上にも下にも記し辨ふる如
くなるが。謂ゆる無智の僧は。畜生道に墮るは多く屎鳶と
成りて。是なる釋子は因を引き。隨分の幻果を得て。種々の變
相を現じ。世をも人をも誑かす物にぞ有ける。其はまた鷲と
鳶とは一類の物にて。鷲は鳶の大きく猛き物。鳶は鷲の小さ
く怯き物にて。形も類なる故に。古くは鷲を鳶とも云へり。然
るに神世に。天日鷲翔矢命といふは。鷲を掌給ふ神と聞え。始

なして弓を製り。弓削氏の祖なる謂によりて。矢に鷲の羽を用
ふる成。天照大御神は。天岩屋に幽居し々時。弓六張を竝べ
て琴と成て。其子長白羽命に奏しめ給へる。其時に金色の鵄
高幡の上に居なりと有る。やがて天日鷲命の暫く化なると
通ゆれば。鷲なるべきに。鵄となるは。形の類なれば言ふなに
て。此縁によりて。天日鷲命をまた天金鵄命とも申せり。
琴彈く上り金色の鵄と化て來れる。されば鵄尾琴を製れる
事。本なりまゝ、神武天皇は。大和國に征入り給ふ時に。金色
の鵄。御弓の弭に止れりと有も。天日鷲命の化なるにて。鷲
なる證く覺ゆ。外に古史傳に委く考へ記せるを見るべし。

但し此は神の御態あるを。釋魔の鷲は形を現じられ。寶物集に。東大寺は一番の別當。良辨僧正は。相摸國の人なり。三歳なれと記。父母懐き出して愛せるを。金色なる鷲來りて抓去りぬ。父母悲むと云へども。空に消えて失せぬ。鷲ハ大和國春日山なる木の空に置て是を養ふ。此子日陂歴年積りて。物の心付く程に。佛法を修行せし人。是ぞ金鷲仙人と名付く。

此事今昔物語。古事談。佛法傳通縁起などに見えて。金鐘行者とも云り。はた元亨釈書には。釈良辨。姓百濟氏。近州志賀里人。其母祈觀音像而得。二歳時母桑焉。置兒於樹陰。忽大鷲落捉兒而去。母悲望趁鷲而往。不歸家。初南京義淵詣春日神祠。見鷲鳥于野。將小兒也。鷲見人而避。淵收而歸。甫五歳就學。聞一知十云々と見え。また大山縁起と云書に。良辨者相摸國鎌倉郡由伊鄉人也。俗姓漆部氏。當國良將漆屋太郎大夫時忠子也。母未之聞也云々。時忠年洎四十無胤子。遂就幽冥禱。是或夜夢有一高僧來告曰。汝所請求我哀之。授一卷。亦曰我是靈山釈迦。斯妙典弥勒菩薩也。時忠夢中嬉懽甚。即披而閲之。法華經第一卷也。如言告妻。妻曰今夜妾亦夢。夢状相同。無違矣。夫婦感夢知其有子。既而有身。遂生一男。父母以爲匪凡人。育之鍾愛尤切。歴五十日乳母提携遊觀園中。金色鷲不意飛來。摯其兒入雲矣。云々とあるを以て。金色鷲の佛魔な

る事を知るべし。行嚢抄に。此全文を引きたれば。古き書と見えたり。また同書に。相傳曰。父は大住郡三宮大明神是也。母は則號易産大明神ともいへり。

仙人さのみ木の空にて。佛法を修行すべきに非ず。一堂を建立せむと思へども。私力なくて叶ふべくも無かりければ。公家に申さばや思ひけるが。奉公無ては、いかで。天聴を驚さむと思ひて。南無聖朝安穏といひ。稽首する聲。聖武天皇の奈良都に御座しける頃なるに。隠なく聞えけり。また金色の光。春日山より來りて。禁中を照すと見る人あり。はた春日山に。弥勒光を放ちて御座すと。多くの人の夢に見ゆ。

此は金鷲行者は。弥勒の化現といふ事を。普く人に知しめて。世に用いられむとして。行ける幻術の夢なり。佛者の多くなせる所為にて。上に引ける大山古縁起にも。良辨を弥勒と云ふ事なり。

是故に天皇勅使を遣して。仙人を召て故を問給ふ。仙人願の有状を申す。天皇徳に帰して一堂を建立し給ふ。今の東大寺是なりと有り。此不思議どもは。凡て佛法の異験まで。金色の鷲やうて釋魔なりし故に。良辨を木の空に養ひ。幻通を起して聲を遠音に響かし。光りを放ち夢を見せなど。種々の異験を現はし。天聴を驚かし奉れるにて。是ぞ釋魔の鷲の形を現

せる始めける。
然れば此事は。巫學談弊に。東大寺建立の事を論へる處に。委
く辨へされど。此ゟは大畧を云なり。義楚六帖に。西域記云。
霊鷲山似鷲鳥有霊多集。故名霊鷲峰聳類臺。故云鷲臺山と
いひ。また法顕傳に。祇闍屈山有大石室。阿難入定魔化為鷲
鳥來怖阿難とあるは。由有げなる事なり。また名義集三巻
にも。常在霊鷲山の事を云へれど。披き見るべし。因て云ふ。
抱朴子廣譬篇に金鶏不競撃於小鶏とあり。和名抄に。唐韻
云。鶚大鵰也。鵰鶚鳥別名也。山海經注云。鷲小鵰也。鵰和名於
保和之。鷲古和之と有れど。此金鶏も黄金色の鵰を言へるか。

他し漢籍には。此熟字未見當らず。猶考ふべし。
扨又同書に。慈恵僧正は。金色の天狗と化りしを云へるも。金色
の鷲の形を云へりと聞ゆ。其は雲景が未來記に。崇德天皇の
御霊の御形を。金色の鵄の形に見成し奉れるを。思ひ合せて
辨ふべし。是また鷲を鵄とも見成せる一證とすべし。扨て鵄
の正しく。佛菩薩に縁有る事を知べきは。今昔物語集に。大和
國平群郡の鵤村に。岡本寺といふ寺なり。尼の住める寺なり。
此は聖德太子の宮なりしを。太子誓願を發して。尼寺と為
給へりと。霊異記に見えたり。
其寺に。銅の観音の像十二體あり。而るに聖武天皇の御世に。

彼像六體を盗人に取られぬ。尋求むれども得ず。其後程を經て。其郡の驛の西方に小き池あり。夏のころ其池の邊に。牛飼の童部ども在けるに。池中に小き木指出て。其木に鵄居たり。
此事霊異記にも載せて。鵄を鵰また鷲など誤れり。
さて本草綱目に云く。鵰似鷹而稍小也。其尾如舵。極善高翔。專捉雞雀。其攫物如射と。寺嶋良安云く。鳶鴉有害無益。而多有之鳥為人所憎也。然俗傳曰。愛宕之鳶熊野之鳥。以為神使。未知其據也といへり。良安鳶と鴉をば共に悪鳥と云へれども。二鳥共に悪き中にも。ことさら世の為人の為となる事も有とを覺ゆるを。其を此に言はず。偖また鳶と鴉とは。甚も中悪く。鴉の鳶を責むる事は。深き由有げなる事なれ。
童部これを見て。礫塊など拾ひて打けるに。鵄去らずして尚居たり。然れば童部投打つ事を止めて。池に下りて鵄を捕へむとしけるに。鵄忽に失せて。居たりける木は如何に有り。其木をよく見れば。金の指にて有り。童部怪みて。此を取て牽上るに。觀音の銅像なれど。童部共の陸に牽上げて。里人に此事を告ぐ。里人も共に來て見るに。岡本寺の尼等も。此事を聞て。里人も共に來て見るに。岡本寺の觀音なりけり。塗たる金は皆褫落たり。尼ども觀音を圍繞して泣悲み。忽に輦を造りて。本の岡本寺に渡して安置したり。其邊の道俗男女。集りて禮拜して。錢を鑄る盗の態ならむと云

ひき。此を思ふに。彼池に有ける鶏は。實は鶏にも非じ。觀音の
鶏と變じて示し給ける也。と有を見て知べし。此事霊異記に
も載されず。見合せて記しおく。撰者の評に。彼池に有ける鶏は。
實の鶏には非じ。觀音は變じて鶏と成まる也。とあるは違へ
り。然るは觀音と云ふは。元より有名無實の佛なるが。其霊驗な
る事は。釋魔の態なるに。彼池に有ける鶏は。此觀音像に憑り
て。其驗を示せる釋魔が。眞の形を現じて。盗人の為に。池に隠
されて在る由を示せるにて。觀音の霊驗といふは。皆これ類
なり。かく論ふをも。疑はむ人は為にまれ言はず。源平盛衰記
に。文覺は渡邊黨に。遠藤左近將監盛光が一男。上西門院の北

面の下臈なり。其母いまだ子なし。夫妻共に家の絶なむ事を
歎きて。長谷寺の觀音に詣で。七箇日祈り申ければ。左の袖に
鵄は羽を給はると夢に見て。懐妊して儲ける子なり。父は
六十一。母は四十三にて生れたる一男なり。
觀音は。天狗なること元よりなれば。其一羽を別けて。まだ
し子は魂とは為せるなり。
母は難産して死ぬ。三歳の時父盛光も死ぬ。十八歳にて。糸惜
き女に後れて髪をきり。日本一州の高き峰至らぬ地なく。七
日。二七日。三七日。百日籠り行ひ。十八歳にて出家して。一十三
年の間。山臥修行者の勤苦なり。此文覺は。天狗の法成就の人

にて。法師をば男になし。男をば法師になしなどして。現心は無りけれども。ゆゝしき荒行者にて。度々鍔金顕しける者なりし。心ざしぶかく。身も健にして。立ぬ願もなく。せぬ業もなし。斯ありければ。發心地。物氣れど云て請用隙れし。向と向ぬるに空しき事はれし。餘りに暇なき折は。念珠袈裟を遣して。病者の目にも見せ。手にも取せぬまで。忽ち験を顕さん。

観音は右に云如く。有名無實の物なれど。それが霊験とて種々のことをするは。釈魔の観音となりて有る故なり。然るは是が父母。その後胤の絶むことを悲みなむには。神に祈るべきあとなるに。観音を祈るは。時世の状なればいふにならねど。観音もし善心のものならむには。其願のおとく。家を継べき子を授くべきに。天狗を授て出家せしめ。家の継子絶るは。いかに天狗の枉まる所為ならずや。係りしかば。元來天狗根性なる上に。慢心強く。高聲多言にして。人をも人とせざりけるに餘りに。法皇の御所にあばれて。獄に入られなりけれど。悪口止ず。遠くは三年。近くは三月が中に。思ひしらせ申さむ。三寶護法とりぐす。利生を現じ給へと。手を合せ念珠を揉て。院御所を呪詛し奉りけるに。獄中の者共も。身の毛竪て覚ける。されぞにや上西門の女院指る御悩もおはしまさずして隠れさせ給ひけり。斯て文覚は。院御

所ふて悪口を吐き流罪せられ。伊豆國奈古野が奥と云所ふ。観音の堂あり。奈古野寺と名く。其傍ふ侘やし圯菴を結びて。閉籠りて年月を送り給ふ。深く大悲の誓願を憑みて。不退の行法薫修せりと見えたり。まさ正しく天狗の鵄と化まりといふ事も。同集ふ。讃岐國ふ万能池といふ。極めて大なる池あり。其池ふ住める龍。日ふ當らむと思ひけるにや。池より出て。人離たる堤の邊ふ。小蛇の形ふて蟠り居たりけり。

龍の大小變化自在なる事は。和漢の書等ふも記し傳へ。今も目のあたり。小蛇と見たるが。大龍と成りて雲を起し。氷を降し昇天せるを見る人ぞ。程も有り。然れど心狭き漢學者は得知らで。然る事なしと思へり。

其時ふ。近江國比良山ふ住める天狗鵄の形となりて。其池の上を飛廻り。此小蛇の蟠りて在るを見て。鵄返下りて掻抓みて。遥ふ空ふ昇る。龍力強き物なれども。思懸ざる程ふ。俄ふ抓れぬれば。更ふ術盡て。ゐぶ抓まて行くふ。天狗小蛇を抓碎きて食はむと為るふ。龍も力強きふ依て。心ふ任せて抓碎くこと能はずして。遥ふ本の栖の比良山ふ持行て。狭き洞の動くべくも非ぬ處ふ打籠置ければ。龍は一滴の水も無ければ。空を翔る事も叶はねば。破无て只死なむ事を待て居たり。

龍の神通自在なるも形をかく小さく變じては。其變じた

る形の量(ホド)ならでは。用を成(ナス)すと能(アタ)はじ。かく怯(ツタナ)くて苦(タシナ)み居るこそいと墓无(ハカナ)けれ。説苑といふ漢籍(カラブミ)に。伍員が呉王に云けるは。龍は魚の形になりて。浪に戯(タハム)れて浮(ウキ)れる程に。預諸と云ものゝ網(アミ)を引けるに懸(カヽ)りて悲(カナ)しき目を見て。大海にかへりて龍王に訟(ウタ)へければ。龍王ことわりて云く。何(ナニ)しにか魚の姿(スガタ)とは成れる。然(サ)ればこそ網にもかゝりけれ。今より然る事をなすまじき也と云へる事あり。虚實は知らねど。豐臣太閤に。曽呂利が鬼神の夢(ユメ)に託して。諫(イサ)めし言をも思ひ合せて。人は無下(ムゲ)に品をば落(オト)すまじき物なりけり。

而(サ)る間(ホド)に。彼ノ天狗比叡ノ山に行て。短(ヒマ)を伺(ウカヾ)ひて。貴(タット)き僧を取(トラ)むと思ひて。夜東塔の北谷に在ける。高き木に居て伺(ウカヾ)ふ程に。其向(ムカヒ)に造懸(ツクリカケ)たる房あり。其房に在る僧。椽に出て小便(ユバリ)をして。手洗(アラ)はむが為(タメ)に。水瓶(ミヅガメ)を持(モチ)て手を洗ひ居るに。此天狗木より飛(トビ)來て。僧を攫(カキツカ)みて。遥(ハルカ)に比良ノ山の栖(スミカ)なる洞に行て。龍の在る處に打置(ウチオキ)ぬ。僧は水瓶を持ながら。我にも非で居たり。今は限(カギリ)と思ふ程に。天狗は僧を置て去ぬ。

此所行(シワザ)を具(ツブサ)に思へば。本文に鴟とも有れど。みな鷲(ワシ)の所行(シワザ)なり。舊(フル)く鷲と鳶とを混じ云へるなり。此(コ)をもて悟(サト)るべし。鴟は人を抓み去りて。碎(サキ)食(クラ)ふ程の事はなき物にて。鷲こそ然(サ)ることを常にするをや。

其時に。暗き處に音有りて僧に問云く。汝ハこれ誰人ぞ。何より來ぞと問ふ。僧答て云く。我ハ比叡山の僧なり。手を洗はむ為に。坊の椽に出たりけるを。天狗俄に抓み取て。將來れるなり。然れど水瓶を持ながら來たるなり。抑かく云ふハ。また誰ぞと云に。答云く。我ハ讃岐ノ國万能池に住む龍なり。堤に這出たりしを。此の天狗空より飛來て。俄に抓みて此洞に將來れり。狭くて為む方なく。一滴の水も無れば。空をも翔らずと云ふ。僧云く。此持たる水瓶に。若一滴の水や殘さらむと云へバ。龍此レを聞て喜て云く。我レ此處にして日來經て。既に命終なむと為るに。幸に來會し給ひて。互に命を助くる事を得べし。若

一滴の水あらば。汝が本の栖に將至るべしと。僧また喜て。水瓶を傾けて龍に授くれバ。一滴許の水を受けり。龍喜びて僧に教へて云く。努々怖るゝ事無して。目を塞ぎて我に負れ給ふべし。此恩更に世々に忘まじと云ふ。爰に龍忽に小童の形と現じて。僧を負て。洞を蹴破りて出る間に。雷電霹靂して。空陰り雨降こと甚怪し。僧ハ身振ひ肝迷ひて怖しと思へども。龍を睦び思ふが故に。念じて負れ行く程に。須臾に比叡ノ山の本れ坊に至る。僧を椽に置きて龍ハ去ぬ。

龍の人語を成せる事を。漢學者の見狭き倫ハ。疑ふも有べけれど。神に入るときは。物として人語を成ざるはなきを。

たゞ人のみぞ。物と語を通はすること能はねど。此はよく古へ學びして辨ふべし。はた龍の水を得ては。其自在かくの如く。水を失ひては。怯きこと蚯に異ならず。

彼房の人々。常の霹靂して房に落懸ると思ふ程に。俄に坊の邊暗夜の如く成て。暫許ありて見れば。一夜俄に失にし僧様に在り。坊の人奇異く思ひて問ふに。事の有様を委く語る。人皆聞て驚き奇異がりける。其後に。龍彼天狗の怨を報ぜむ為に。天狗を求むるに。京に知識を催す荒法師の形と成て行けるを。龍降りて蹴殺してけり。然れば翼折たる屎鳶にてなむ。大路に踏れける。龍は僧の徳に依て命を存し。僧は龍の力に依りて山に返る。此も機縁なるべし。此事は。彼僧の語り傳へを聞継て。語り傳へたるなりと有り。

但し此物語。僧の房に返りたる迄の事は。僧の語れるにて知らるれども。其後に龍の天狗を蹴殺したる事は。如何して知けむ。此は雷電霹靂して。荒法師を蹴殺しぬるが。古屎鳶と成て大路に在けるを。彼僧の物語りに思ひ合せて。かく語り傳へしなるべし。

はた天狗の正に佛と現じたる事も。同書に。延喜の天皇の御代に。五條の道祖神の在る處に。大なる實成らぬ柿木有けり。其木の上に。俄に佛現れたる事有けり。微妙き光を放ち。様

様の花を令降などして。極めて貴かりければ。京中の上中下
の人。詣集る事限なし。車も去敢ずかく喤るほど。既に六七
日に成りぬ。
此に據りて思ひ合さるゝ事あり。其は万葉集に。「玉葛實成
らぬ木には千早振。神ぞ就くとふならぬ木ごとに。」と有る
は。かゝる事を詠るなり。實ならぬ木とは。梯栗桃などの類
の。實の成べき木にて實ならぬを云ふ。然れど實のなるは。
此樹どもの常にて。成べき實の成らぬは變なり。其常なら
ば變なるが。則妖魅の託く所なり。此歌も正しき神の事に
は非ず。鬼魅の類ひを云へるなり。其は千早振と有るにて

も知べし。此は人の解得がたき事ある故に。聊か注しおく。斯
有れば。然る木どもも有なむには。速に伐棄べき事にこそ。
其時に光右大臣と云ふ人あり。深草の天皇の御子なり。身才賢
く智明なる人にて。此佛の現じたる事を頗る心得ず思給ひ。
實の佛は。木末に出給ふべき様なし。此は天狗などの所為に
こそ有めれ。外術は七日こそ過ね。今日我行て見むと出立給ふ。
外術とは外道の術といふ事にて。佛法より外の術をいふ
語なり。大論に委しく見えたり。
装束直くして。檳榔毛の車に乗て。前駈など直しく具して。其
處に行給ひ。若干詣集れる人を拂ひ去させ。車を搔下し榻を

立車の簾を巻上げて見給へば。實に木末に佛在り。金色の光を放ちて。空より樣々の花を降すこと雨の如し。見に實に貴きこと限なし。而るに大臣はこむる。怪しく覺え給ひければ。佛に向ひて目抜も瞬かずして。一時ばかり守り給ひければ。此佛暫くこそ光を放ち。花をも降しなどしけれ。強に守る時に。侘て忽に大なる屎鵄の翼折たるに成て。木上より土に落てふためくを。多くの人此を見て。奇異なりと思けるに。小童部ども寄りて。彼屎鵄を打殺してけり。

和名抄に。本草に云。鴟一名鳶。和名土比。爾雅注に云。鳶一名鵟。喜食鼠而大目者也。漢語抄に云。久曾止比とあり。寺嶋良安云く。鵟狀似鳶而羽毛疎。飛翔不能鷙鳥。但攫牛馬枯糞或魚物鳥雛食之と云へり。此を馬屎鳶とも云ふ。常の鳶よりは稍大に。羽毛疎びて。汚く憎さげ樣したる古鳶をいふ。然れど常の鳶と處を異にするに非ず。共に交りて有が中に。稍形の異なるがあるなり。合類節用に。鵟字まゝ鶚字なれどを。グソトビと訓み。戴勝を。マグソツカミとも。グソトビとも有り。偖はさ馬屎鷹といふ物あり。此は屎をこそ攫め。鷹の類にて。鳶とは異なり。寺島氏こを鵟と同じ物に記せるは誤なり。

大臣は然ればこそ。實の佛は。何故に。俄に木末には現じ給ふべきぞ。人の此を悟らずして。日來禮み喧るが愚なりと云ひ

て返し給ひにけり。然れば其庭の若干の人ども。大臣をなむ讃申ける。世の人も此を聞て。大臣は賢かりける人哉と。讃申けると見え。

身の才實に賢き大臣にぞ御ける。然れども。實の佛ならば貴くて。木末などより出べき物に非ず。と思はれたる由なるは。實の佛も眞にて。屎鵄の大きく。殊に幻通を得たる物と志も思はれざるは。甚惜き事なり。此事は宇治拾遺物語にも見えたれば。合せ見て擧たり。

さて十訓抄に。後冷泉院の御時。天狗あれて。世の中騒がし有ける頃。西塔に住ける僧。白地に京より出て帰りけるに。東北院の北の大路に童部五六人ばかり集りて。物を打領じけるを。歩み寄て見れば。古鵄の世に怖しき氣なるを縛り搦めて打けり。いかに忌じれど如此するぞと云へば。殺して羽を取らむと云ふ。此僧慈悲を發して。扇を取せて。此を乞取て放ち遣ける。世の諺に太郎坊も鳶と成ては。鳶だけの智慧ならでなし。と云ふ事思ひ合さる。さて上に云る万能池の龍の事をも思ふに。此鵄を大じき天狗なりしかども。鳶と化りて捕へられしかば。かく怯りてしけり。まさし此事。里人談に本朝語園を引て。永承の頃と有り。

忌々しき功徳造れりと思ひて行ほどに。切堤のあたりに藪よ

り異様なる法師の歩み出て。後れじと歩み寄ければ。氣色覺えて。傍に立よりて過さむと為けるに彼法師近よりて云ふやう。御憐みを蒙りて。命生て侍れば。其悦聞えむとてれど云ふ。僧立帰りて得こそ覺えね。誰人にかと問ければ。然ぞ思ひらむ。東北院の北の大路にて辛き目見て侍りける老法師に侍り。生者は命に過ぐる物なし。斯ばかりの御志には。争でか報じ申さぐらむ。何事にても念比なる御願あらば。一事叶へ奉らむ。己はかく知らせ給らむ。小神通を得されば。何かは叶へざらむと云ふ。淺猿く珍なる態かなと。六かしく思ひながら。細やかに云へば。様こそ有らめと思ひて。我は此世の望更になし

年七十に成れり。然れば名聞利養ハ味氣なし。後世こそ恐しけれども。其はいかでか叶へ給ふべきなれば。申に及ばず。但し釋迦如來の霊山にて説法し給ひけむ粧ひこそ。感かりけめと思ひ遣られて。朝夕心に懸りて。見ま欲く覺ゆれば。其有状をまなびて見せ給ひなむやと云へば。最易き事なり。然様の物效するを。己が徳と為るなりと云ひて。下り松の上の山へ具して上りぬ。しばし目をふさぎて居給へ。佛の説法の御聲聞えむ時に。目をば開給へ。但しあれ畏こ貴しと思されむ。信をだに發し給はゞ。己がためは悪からむと云ひて。山の峰の方へ上りぬ。

天狗は此言をよく思ひて。世に佛丼の霊験。又天上極樂
地獄など云ふ處ども我。人に見せるれど。釋魔の變現なる
事を辨ふべし。まさかく云ひて上は流も。霊山說法は狀を
上る時の志有にせむやてあり。其由下ノ文を見て知べし。
とばかりにして。說法の御聲聞えければ。目我見開さるに。山も
霊山なれり。池も紺瑠璃となり。木も七重寶樹と成て。釋迦如
來獅子の牀は上におはし坐し。普賢文殊左右に座しゐり。菩
薩聖衆雲霞の如し。帝釋四天王龍神八部所もなく充滿さり。
空よりて四種は花降りて香しき風吹き。天人雲に列なりて。微
妙の音樂を奏ぐ。如來寶花に座して。甚深の法門を演說し。其

事がら。大かた心も言葉も及がさし。暫こそ甚しく學び似せ
さりなど。興有て思えられ。樣々の瑞相見るに在せは說法の
砌に望めるが如し。信心忽に起りて。隨喜の涙眼に浮び。渇仰
の思ひ骨に徹る間手を額にあてゝ。歸命頂禮せる程に。山彩
しくはらめき騷ずて。有つる大會かき消つ如くに失せぬ。夢
は覺るが如し。さは如何に志つる事ぞと。忙き騷ぎて見廻せ
ど。もと有つる山中草深あり。淺猿ながら。然て有ぬきならぬ
ば山に上流る水のみは程ふて有つる法師出來て。然ぞりて
契きる事を違へ給ひて信を發し給へるに依て。護法天童降
りて給ひて。何とて斯ばかりての信者をば。誑かれぞとて我等を

責め給へる間雇ひ集めたる法師原も。からき肝潰して迯去り
ぬ。己が片々の羽がひ打きて術なしとて失にけりと見ゆ。
かく宜々しげに。護法天童降りて云々と云へるは。變現し
たる霊山の状を止さんためにて云へる幻語なり。然るは護
法天童とて。佛法を護る物の天上に在すといふは。佛法の幻
説にこそ有れ實に然る物の有るに非ざれどなり。偖これ此
事は本朝語園にも見えたるが。其本は今昔物語集に記
せるを採れりと思へば。但し今傳はる今昔物語には比叡
山ノ天狗報ニ助僧ノ恩ヲ語といふ題のみ有て。文は闕たり。必ず此
を採たるなるべし。是ら正しく形を古屎鵄に受て。幻通ある

る天狗なり。
抑釋魔の鷲または鵄の形を受る事は。上に論へる如く。天狗と
いふ物は。元より狗にも狸にも似たるが。高鼻長喙にて翼あ
り此れもまた種々の鳥獣も化れど。鷲の化たるが多かるもの。山
人説なれば。其部に入る故に。此形を受るなるべし。
但しそれ皆から。一様の形とは聞えず。人體のまゝに高鼻
なるも有り。また翼の有るも無きも。交たると見えたり諸
國里人談といふ書に。駿河遠江の境なる大井川にて天狗
を見たるなり。闇なる夜の深更に及びて。潜に封墻堤の陰
に忍びて伺ふに。鳶の如くなるが。翅の徑六尺ばかりなる

大鳥の様なる物川面にあまた飛來て上下して魚をとる様なり。人音すれば忽ちに去る。是は俗にいふ術なき。木葉天狗などいふ類にやと見ゆ。遠江國人中村眞幸云ひけるは正しく其形を見たる事は無れど。秋葉その外高き山々に夜々天狗の火とて數多見ゆる事あり。其火の状留りて在るかと見れば。遥に飛去など見み見えずみ。樹間に出沒する事なり。又時として彼物の噂など同じさまに云ふと記は其火忽ちに目近く來りて煌く事有り。大さ件の火に見ゆるも。夏の事なるが電し雷の音聞ゆれば。有ける火ども次々に去失ぬ。其ほまは雷に聞えぬ方に逃行くやうにて。終

に見えずなりぬ。是は常の事なれば。必ず其形を見る人有べしと云へり。又疫病疱瘡神など。都て妖魅の類の。雷を怖るゝ事思ひ合さる。

然れども然る忌じき形を受るは。大天狗小天狗などいふ強猛なる釋魔なるが。高くも卑くも。尋常の無智なる僧は。屎鷄ともなく。凡の鷄と成ぞ見えたり。

其は法師は。總じて人の門に立て。物乞ふ倫までも。自然に貢高邪慢の心深く。吾こそ最無上の尊き道を行ふ。聖よと思ひ顔にて。俗家を凡夫と陋しむる心は。ほどくり有て。有智無智をいはず。俗家の物を掠め取らむと欲する心。常

に見ゆるを。鷲また鳶はも。隙を伺ひ。人の手に持たる物を
ちすに。抓去らむと欲するが。其性の似たる故に。互に生拔
變ふるにや有らむ。但し此を試に云ればぞ。因に云ふ。先年
我許に使へたりし男の。遠江國人なるが云けるは。吾郷の邊
に。天狗の漁獵と云ひて。池また堀などの魚。大き小さき悉
に死てある事有り。然るに其魚。目一つもなし。此を皆彼物
の取食へるなりと云へり。天狗もする業もある事にや。俗
諺に。悪がしこく。人の見ぬまに物するを。眼をぬくと云事
あり。此天狗の所為より云ひ出せるか。
然るは沙石集に。和州菩提山の本願僧正。此房に。忠寛正信房

と云僧有けり。餘りに眠ければ。眠正信房とぞ云けるとて。是
が甚じく眠れる事どもを記し。偖其死れる後の事を記して。
近ごろ興福寺の東門院に有ける兒隠所に居たりけるに。春
日山の方より。鵄一羽來りて。此兒の前に眠り居たり。怖しさ
に。腰刀を拔てはさと切て。やがて絶入したりけるを。人見つ
けて。房へ抱入まで祈けり。刀に血付き鵄の毛散りけり。
ちて口走りて。忠寛が何とかく眠居たるを過ぐる事易から
ばとぞ云ける。とかく祈しらへて。別事無りけり。先生に眠
りしが。生を隔てても眠るにこそ。習因習果といふ事あり。
辨ず知べし。常に心ろ思ひそみ。身に馴ぬる事は。生を經れども

相次て忘れず。捨難くして。自然に為られ思ふべき也と有り。

習因習果の説實に然る言なり。心有らむ人は。よく此理を思ひて。常に因を神の道に習ひて。神の道に果を得む事を思ふべし。

遍く舊き諺にも。鵄は天狗の乗物といひ。山伏の果は鵄に成るとも云へれど。無智の尼法師山伏なぞは。大凡鵄と成りて。天狗の下使を為て。人間に神の守なき透間を伺ひ。妖魔の入る手引を成す物と見えたり。

鵄を天狗の乗物と云ふ諺は。源平盛衰記に。治承元年四月廿八日の大火の處に。指巫と名を得たる盲卜者が。火本は樋口富小路と云所聞て。占は推條口占とて。火口と云へば燃廣がらむ。富小路と云へば。鵄は天狗の乗物なり。小路は歩む道なり。天狗は愛宕山に住めば。天狗の所為にて。巽の樋口より。乾の愛宕を指て。筋違さまに焼れぬと覺ゆ。と云へる由見えて。果して其言の如く焼たり。今世にも。尻尾の切為る鳶の飛ぶこと有る邊は。ともすれば火災ありなど云ひ。鳶は太郎坊が使者なりと云めり。山伏の果は鵄になると云ことは。猿樂の柿山伏といふ狂言の言葉に見えたり。共に舊く然る諺の有しに依りて云へるなり。また梅窓筆記に。焼亡は太郎次郎と云ことぞ。清獅眼抄。後清錄記云。治承二年

戊戌四月廿四日夜半許。七條ノ北東洞院東中許。洞院ノ面焼亡。世人號ニ次郎焼亡ト也。太郎ハ去年四月廿八日。至ニ于大極殿ニ焼亡。云々と有るも由有げなる事にて。また近き世に記せる書なれど。新著聞集に。京の釜座下立賣下ル町に。丹後屋佐兵衛と云ふ絹屋有しが。機を二十四立たる。或時機の鳥居に鶏とまり居眠れる。其翌朝よりて。一ト機の糸何となく切されり。誰がわざぞと穿議しけれども。更に證據も無く。此の如く毎日切る〻程に。後には二十四機残らず切されしかば。祈禱など修する處に。猶も切れたる。或人云く。今度の次第を思ふに。惰慢の心より。斯る災のありしにや。最初に鶏の來りしも。只

事に非ず。愛宕信仰然る驗しと云へば。實に尤もの事とて。正五九月に。愛宕山に百味を献り。月詣すべきよし。立願せしかば。災忽ちに止みたりと云事ありて。また下總國香取ノ郡万歳村なる門人。高橋ノ正雄が語りけらく。近き程我が村の後ノ山へ。村の者ども五人連立て。木こりに行ける處に。少し傍なる山の端に。常のよりも汚氣に見ゆる鶏一羽。羽を休め居たり。其を見て中なる一人が。恐ろしげなる山伏の立居たると云ふ。然るに四人の者は目には鶏とのみ見ゆれば。云ひ諍ふに。彼一人のみ。正しく山伏なる者をと云ひて。更に四人が言を聞入ざれば。共に山よりて帰りて後に。彼男忽に熱さし煩

ひて死たるが残り四人は何事も無りき。甚異しき事あり
と語りき。猶山伏も見え。鳶と見えたりと云ふこと。外にも
聞たる事なれど。煩かれば悉くは記さず。
於て此餘にも。釋魔と成べき因縁の語等は。經論に多く見え
たるを。彼此記さば。まづ楞嚴經に。佛告阿難。攝心爲戒。因戒生定。
因定發慧。是名三無漏學。婬心不除。塵不可出。縱有多智禪定
現前。如不斷婬。必落魔道。と有るは。婬心を斷ざる僧徒の。魔道
に墮る證文なり。此に依りて熟〻古の。名僧大德と聞えし釋
子等の。婬事に心を蕩したる倫を按ふるに。まづ舊く釋玄昉
は僧正として。光明皇后を犯して。善珠僧正を生せ奉り。

光明皇后は。藤原不比等の女にて。聖武天皇の后なるが。玄
昉も其頃の智識にて。唐土に渡り。種々の經論法文をも傳來
り。朝廷は更なり。世に重く用られたるを。皇后深く愛し給
ひ。玄昉が子を生給へり。善珠僧正是なり。此をもて國史に。
僧正善珠は。光明子の孽子なりと記されたり。然れど天皇
は知看さで。一人も此事を云ひ露はす者無りし中に。藤原
廣繼といひし人有て。天皇に玄昉が奸を奏しけるは。却り
て廣繼を逆鱗有て。筑紫へ流し給ひしかば。廣繼憤りて謀
反を起しぬ。爰に追討使を遣して誅し給ふ。其後玄昉を筑
紫の觀音寺に遣し給へるに。廣繼の霊魂雷となりて。玄昉

が首を抜捨られ妃。委くは國史を見べし。斯て玄昉が霊の
魔道に入る事は。太平記なる雲景が未來記を見て知べ
し。其も下に舉るぞ。

釋道鏡は。如意輪法を行ける驗によりて。高野姫天皇に寵せ
られ奉り。

古事談に。此女帝は。天平寶字六年に。簪を落し佛道に入り。法諱を法基尼と稱し奉る。同七年の九月に。道鏡法師を小僧都となし給ふ。元は河内國人にて。俗姓は弓削氏なり。法相宗にて。西大寺義淵僧正の門流なり。常に禁掖に侍り甚く寵愛せらる。如意輪法の驗徳と云へり。天皇道鏡が陰を。なを不足に思食され。薯蕷をもて陰形を作り。用させ給ふに。折籠りて腫塞り。大事に及ぶと也。百濟國の醫師に。小手尼とて。其手嬰子の手の如くなるが。見奉りて。帝疾癒べしとて。手に油を塗りて。取らむと欲る處に。右中辨百川。霊狐なりと云ひて。劒を抜て尼の肩を切る。此に仍て療する事なく。崩じ給ふと有り。なを道鏡が悪逆は。國史を見て知べし。畏くも天日嗣をさへ窺ひ奉りし。壒嚢抄に。天皇密に藤原押勝を幸し給ひ。また道鏡を召て。寵遇他に異なり。此二人幸人として。威勢を諍ける故に。涅槃經に。所有三千界男子諸煩惱。合集為一人女人之業障。といふ文を叡覽有て。

朕女人なりと云へども全く此儀なし。佛の妄語なりとて。經に小便を為る法給へり。此經の護法神怒れるにや。忽ち婬慾熾盛に成て御座のみならず。女根廣博にして敢て其欲を停がたく。天下に勅を下して。大根の者を求め給ふ。押勝其仁に當りしかども。道鏡なほよく是に叶へりと有て。餘なる事に思召れしぞ。傳へ有る事にや。女は殊に婬心深きものにもはあらぬ。佛説の如きは。御言の如く餘なる妄語なり。然るにかゝる祟れ有しは。釋魔の態なり。護法神といふ物やがて其なり。其由は次々に云ふを見るべし。

釋玄賓は大僧都にて。當時上下に大徳と稱せられ。法師の淨行を云ふにも。必例に引出らるゝ人なるに。大納言なる人の北方に懸想して悩み煩ひ。

今昔物語集。古事談。撰集抄。長明發心集などに。昔玄賓僧都と云人有りき。山階寺の止事なき智者なるが。世を厭ふ心深くて。寺の交を好まず。三輪河の邊に。僅なる草庵を結ひ住りけり。桓武帝の御時此事を聞食して。強に召出ければ。遁べき方なく。慭に參りけり。然れども猶本意ならず思けるや。奈良帝の御世に。大僧都に成給へるを辭申すとて。「三輪川の清き流れにすゝぎてし衣の袖を又は汚さじ」と詠て奉りき。弟子從者にも知せず。何地ともなく失にけるが。其後年

來經て。越路の河の渡守となりて居たりしを。弟子なる僧の。此を通るとき見付たりしかば。又立去りて後に。伊賀國に。或郡司が家の馬飼となりて年來經ける程に。郡司罪有て處を逐はるべしとて歎きけるを慰めて京に伴ひ。此時伊賀國は。昔知たる大納言なる人の。給はりて有しかば。其へ行きて。郡司の罪を許し給はりしかども。浄行の例にも引出されけれど。是より後の事にや。發心集に記せる事なり。其は此僧都を忌しく貴き人とて。高きも賤きも。佛の如く思ひ居ける中に。大納言なる人。年來殊に相憑み給ひたりけるに。僧都はそこはかとなく悩みて。日頃になりぬ。大納言覺

束なさの餘りに。自渡り給ひて。何なる御心地にかなど。細やかに訪給ふを。近く寄給へ。申侍らむと有れば。異くて指寄給へるに。忍びて聞ゆ。誠には殊なる病にも侍らず。一日殿の御許へ詣たりしに。北方の形いと目出度。と見給へりし哉。髣髴に見奉りてのち。物覺えず心惑ひ。胸塞がりて。何にも物の云れ侍らぬなり。此事申すにつけて憚有れど。深く憑奉りて久しく成ぬ。争かは隔奉らむと思ひて。なむど聞ゆ。大納言驚きたまへれば。何かはとく宣ざりし。最安き事なり。速に御悩を止てむ。渡り給へ。何にも宣はむ侭に。便よく計らひ侍らむとて帰り給ひ。上にかくと聞え給ふに。更な

りなれめば仰せられむやも。最浅間しく心憂かれど。かく懇に覺し計ふ事なれば。なぞ辞給はむ。其用意して。僧都かり按内せさせ給へるに。最うるはしく法服正しくして來り給へり。異しく實々しからず覺ゆれど。聞れど立て。ゐる様ある方に入れ給ふ。上の美しく取繕ひて居給へるを。一時ばかりつくづくと守りて。彈指をぞ度々しける。斯て近く寄こと無て。中門の廊に出て。物されむかおぼて帰りにければ。主いよ〳〵尊み給ふ事限なし。不浄を觀じて。其執をひる返さるるほどし。此觀じ人身の汚穢しき事を思ひ解く佛の敎なり。若人の為にも愛著し自も心有らむ時も。必此

相を思ふべしと云へり。大方人の身は。骨肉の操り朽つる家の如し。六府五藏の有状。毒蛇の蟠るに異ならず。血も體をうるほし。筋をはぎ目を抉さり。僅に薄き皮一重覆へる故に。此諸々の不浄を隠せり。粉を施し薫物をうつせど。誰かは偽れる飾と知ざるは。海に求め山に得るは味も。一夜經ぬれば悉く不浄を成りぬ。云はゞ繪かける瓶に糞穢を入れ。腐れる體に錦を纏へるが如し。譬へば大海を傾けて洗ふとも。清浄べからず。若栴檀を燒て匂はすとも。久しく香しからじ。況むや魂去り壽盡ぬる後も。空しく塚の邊に捨べし。身脹れ腐り乱れて。終に白き骸と成り。眞の相を知る故り。

念々に是を厭ひ愚なる者は假の色に耽りて心を惑すになと譬へば厠中の虫は糞穢を愛するが如しと云へりと有り。篤胤今按ふに不浄観の事かく言痛く云へれども此は言に云のみにて更に験なき徒事なり。然るはかく観じて心の解る物にし有らば玄賓僧都が北方に再見えしとも前に見て戀心の起れる時から病付ばかり思ひの凝りし時に此観を為て其心を解べきに。いかに観ずれども戀心は解ざりし故に堪かねて大納言に云りと聞ゆれば相見ては倍々に戀ふる心を増りけれども然ばかりに本意は遂げてこそ此観を為て心解さる状に持成されけむ。或禪僧は態とて人の骸骨をかきて「骨隠す皮には誰も迷ふらむ。皮破れてはかかる姿よ。」といふ歌を書る有り。此も不浄観の心なれども死たる後の骸骨は状を思ひて現に美しき皃を美しと思はぬ理は決て無き事にこそ。其も美き食物も食ひて後は糞となる事を観じたりとも美き味を失はざると同じ理なり。此を思へば俗の口詠に「白骨と観じながらも美しや」と云へるぞ中々に面白かりける。梵網経古迹と云書に。此身不浄累骨所成。血肉便穢薄皮所持。種々臭穢九孔流漏。不浄似浄。謂皮上分白膏熱血交所重映。誑心媚眼。種々焼害。然諸愚夫曾无猒背。云々と見え。まさに眞言の

密法に。男女の髑髏を合せ。壇におき。彈指して觀ずる法有
りと聞ゆれど。上に論ずる如く邪れば。採るに足らず。さて
此大納言は誰なりけむ。何か釈子が信じたりとも。其北方
をそれに逢しめむと爲たるは。物に狂ふ事なり。只不淨觀
のみ爲たる故か事無れど。誠にかの不淨行を行ひさらむ
にも。其を見たく有むか。甚もをこれる大納言にぞ在ける。
さて古今集に。「山田守る僧都の身こそ哀なれ。秋果ぬれば
問人もなし」といふ歌を。彼僧都れといふに。此實ならば。後に
は人に嫌はれし故の述懐なるべし。發心集に雲風の如く
遷ひ行ければ。田れど守る時も有けるにや。と有れど。然る

心には非ず。山田守と云しは。山田曾保登に。僧都を係たる
意なり。然れば。いかに道徳顔したりとも。釋子に心は許さず
まじき物なりけり。
金剛山に行ひ住ける聖人は。御門の御妃に愛著心を發し。現
に妖魔と成りて嬈乱せり。其は今昔物語集に。天狗嬈乱語と
いふ條に。文德天皇の女御。物氣に煩ひ給ひければ。其世に驗有
る僧を召集めて。樣々に御祈修法有けれども。露の驗なし。
此妃は本書に。染殿后と有れど。彼皇后には御まさず。贈正
一位良相公の御女にて。多賀幾子と申し女御なり。其由下
に注ふを見て知べし。此をまゝ本書にも。后と有れど。女御

と記しけり。
而るに大和國葛木山の頂に。金剛山といふ山あり。一人の貴き聖人住けり。年ごろ此處に行ひて。鉢を飛して食をつぎ。瓶を遣りて水を汲む。かく行ひ居る程に。驗並なし。然れば其聞え高く成にけり。

鉢を飛し瓶を遣るは幻術なり。其由別に記せる物あり。さて此聖人の名は。何と云けむ傳はらず。

天皇此の由を聞食して。彼を召て祈しめむと思食して。召して此由仰下されぬ。

天皇は文德天皇なり。此事は此天皇の末世に有し事にて。元亨釈書に考ふるに。天安二年の事と通えたり。されど國史に記されず。其は此書の下文に云如く。極めて便なく憚ある事なればなるべし。

使聖人の許に行て。此由を仰せるに。聖人度々辞し申せども。宣旨背き難きに依て。遂に參りぬ。御前に召て。加持せしめ給ふに其驗新にして。女御の一人の侍女。忽に狂ひて。哭喚なり走叫ぶ。聖人弥々加持せるに。女縛せられて打責らるゝ。間懐中より一ツの老狐出て。轉びて倒れ臥す。其時に聖人をもて狐を繫がしめて。此を教ふ。

さて狐の人に託する事の。物に見えたる始なり。此を教ふと

は。人に託たる事は。畜類として有まじき事の理なれども言
誨せるを云ふにや。
女御は病一両日の間に止給ひぬ。父良相公此を喜び。聖人が
暫く候ふべき由を仰せ給へば。仰に随ひて暫く候ふ間に。夏
の事にて。女御は御單衣ばかりを着給ひて御ける。御几帳
の帷を風の吹返したる迫より。聖人髴に女御を見奉りけり。見
習はぬ心にて。端正美麗の姿を見て。聖人忽に心迷ひ肝砕けて。
深く女御に愛欲の心を發しぬ。然ども為べき方なく。思ひ煩
ひて有るに。胸に火を燒が如くにて。片時を思過べくも思えず。
遂に人間を量りて。御帳の内に入て。女御の臥給へる御腰に

抱付ぬ。女御驚き迷ひて。汗水に成て恐給へども。御力に辭し得
がたし。然れども聖人力を盡して嬈し奉るに。女房たち此を見
て。騒ぎ喤る時に。侍醫當麻鴨継と云者ありて。宣旨を奉りて。女
御の御病を療治せむが為に。宮の内に候けるが。殿上の方に。
俄に騒ぎ喤る音しければ。驚きて走入たるに。御帳の内より
此聖人出たり。鴨継聖人を捕へて。天皇に此由を奏す。天皇大
に怒給ひて。聖人を搦めて。獄に禁ぜられぬ。
文徳天皇御紀。齊衡三年二月辛巳。當麻眞人鴨継。為典藥頭
侍醫。筑前介如故と見ゆ。されど心得がたき事なり。其由下
に云ふを見るべし。

聖人獄に在りて。更に云事無して。天に仰ぎて泣々誓云く。我忽に死て鬼と成て。此女御の世に在はさむ時に。本意の如く女御に睦び奉らむと云ふ。獄司の者此を聞て。父大臣に此事を申けり。大臣聞驚き給ひて。天皇に奏し。聖人を免して本の山に返し給ひけり。然れど聖人本の山に帰りて。此思ひに堪ずして。女御に馴近付き奉るべき事を。強に願ひて。憑む所の三寶に祈請すと云へども。現世に其事や難かりけむ。本の願の如く鬼に成むと思ひ入て。物を食ざりければ。十餘日を經て餓死けり。其後忽に鬼となりぬ。其形身は裸にして。頭は禿なり。長八尺許にして。膚黒きこと漆を塗れるが如し。目は鋺を入たるが如くにて。口廣く開て。劒の如くなる齒生たり。上下に牙を食出し。赤き褌を搔て。腰に槌を差たり。此餓鬼俄に女御の御ましける御几帳の喬に立たり。人々現に此を見て。皆魂を失ひ。心を迷はして。倒れ迷ひて逃ぬ。女房などは此を見て。或は絶入り。或は衣を被りて臥しぬ。而る間に此鬼女御を懐きて。狂はし奉ければ。女御いと吉く取疏びて。打咲て扇を差隠して。御帳の内に入給ひて。鬼と二人臥させ給ひにけり。女房など聞ければ。只日來戀しく侘りつる事共をぞ鬼申ける。女御も咲嘲らせ給ひければ。女房たち皆逃去にけり。

三寶の驗大要かくの如し。諸の人には有のまゝに鬼と見

されど。女御にハ美しき男に見えけむ故に。かく婬れたる御行ひも。有しと聞えたり。
良久しく有て。日暮るゝ程に。鬼御帳より出て去にけまで。女御何に成らせ給ひぬらむと思ひて。女房たち急ぎ参れば。例ノ違ふこと無して。然事や有けらむと。思召たる氣色も無てぞ居させ給ける。少し御眼見ぞ。怖しき氣ある氣付せ給ひにけるより。此由を内に奏けれど。天皇聞食して。奇異く怖しかりしより。何ナ成せ給なむずらむと。歎かせ給ふ事限なし。其後此鬼毎日に同じ様に参るに。女御また心肝も失給はずして。現心もなく。此鬼を媚しき者に思食なりにけり。然れば宮内の人皆此を見て哀に悲しく歎き思ふこと限なし。而る間に。此鬼人に託りて云く。我これらぞ。彼鴨継が怨を報せむとしと。鴨継此を聞て。心に恐怖るゝ間。その後幾程を經ずして。にはかに死けり。また其男三四人有しも。皆狂病にて死けり。
鴨継は。清和天皇紀。貞観十五年三月八日の下に。從四位下行主殿頭兼伊豫權守。當麻眞人鴨継卒となり。然るに此妖事ハ。天安二年の事にて。貞観十五年より十六年前の事なれば。極めて餘人なりけむ。
然れば天皇並ノ父大臣。此を見て極く恐怖れ給ひて。諸の止事なき僧共をもて。此鬼を降伏せむ事を懃に祈らせ給ける

に様々の御祈共有ける験にや。此鬼三月許も不参ければ。女御は御心も直りて。本の如く成給ひにければ。天皇聞食し喜ばせ給ひて。今一度見奉らむとて。女御宮に行幸有けり。例より殊に哀なる御幸なりとて。百官みな仕りけり。此の文勢を見るに。今度の御幸は。此女御のかゝる嬈乱に逢給れぞ以来は御幸ならじと。思食し定給ふ物から。然るがに哀に思食す方はありて。一期の見納めとも思食して。入御あらせ給へると知されり。最哀なる御事なりかし。天皇既に宮に入らせ給ひ。女御を見奉らせ給ひて。泣々哀なる事ども申させ給ければ。女御も哀に思食けり。形も本の如く

にて御座而る程に例の鬼。俄に角より踊り出て。御帳の内に入けり。天皇此を奇異と御覧ずる間に。女御例の有様にて。御帳の内に急ぎ入り給ひぬ。暫計有りて。鬼南面に躍り出ぬ。大臣公卿より始めて。百官みな現に此鬼を見て。恐れ迷ひて。奇異と思ふ程に。女御まゝ取次きて出させ給ひて。諸人の見る前にて。鬼と臥させ給ひて。艶に見苦き事をぞ。憚る処もなく為させ給ひて。鬼起にければ。女御も起て入らせ給ひぬ。天皇為べき方なく。思食し歎きて返らせ給ひけり。

我が天皇命はしも。挂巻も畏き。天照大御神の。美麻命に御まして。其大宮も。大御神と共殿に御座すべき宮にし有れ

ぞ。假にも穢き法師などをば。近付給ふまじき事なる哉。用
明天皇の御世に。聖德太子も蘇我ノ馬子が心として。豊國の
名もなき法師を禁裡に入レ給へるよりぞ。事始まりて。後々は
然る古き道をぞ思召さず。天神地祇の御政事をば。麁略に
成し給ひ。何事に付ても。法師を召て物せさせ給ふ事と成
しかば。皇神等の御守り薄く成し故にや。もはれぞ。法師の
妖事に逢給ふこと多く。斯有いみじき妖魔の嬈乱をさへ
に受給ふ事も有しぞ。悲とも悲しきわざに非ざらめや。
然れば止事無らむ女人は。此事を聞て。専に法師をば。近付べ
からず。此事極めて。便なく憚有る事なれども。末世の人々に

見しめて。法師に近付かむ事を強に誡めむが為に。かく語り
傳ふと有り。
末世の人々に見しめて。法師に近付かむ事を誡めむとぞ。か
く憚有る事をし。祕さず書殘されたる。撰者の心こそ。最も
賴もしかりけれ。上なる玄賓僧都が志と。下に記せる志賀
寺の上人。清水寺の先別當が事など。思ひ合すべし。
是よりぞ後の事也。宇治拾遺物語に。女御物ノ氣に惱み給へるを。
本書に。此は染殿ノ后と有れども誤なり。其は下に。元亨釋書哉
引て注を見て知るべし。
或人申けるぞ。慈覺大師の弟子に。無動寺の相應和尚と申し

そ。いみじき行者にて侍れと申されければ。召に遣さる。即チ御使に連れて参りて。中門に立たり。人々見れば。丈高き僧の。鬼の如くなるが。信濃布を衣に著て。椙の平足駄をはき。大木槵子の念珠を持たり。其躰御前に召上べき者に非ず。無下の下種法師にこそとて。只簀子の邉に立ながら。加持申べしと各々申して。御階の高欄の本にて。立ながら候へと仰下しければ。御階の東の脇の高欄に。立ながら押懸りて祈奉る。女御は寢殿の母屋に伏給ひ。いと苦氣なる御聲。時々御簾の外に聞ゆ。和尚纔にその御聲を聞て。高聲に加持し奉るに。人々身の毛よだちて思ゆ。暫し有ければ。女御紅の御衣二ツ計に押包まれて。

鞠の如く簾中より轉び出させ給ひて。和尚の前の簀子に投おき奉る。人々騒ぎていと見苦しく。内に入れ奉りて。和尚も御前に候へと云けれども。和尚かゝる乞食の身にて候へば。爭か罷り上るべきとて。更に上らで。始も上られざりしを安からず憤思ひて。只簀子にて。女御を四五尺あがりて打奉る。人々あわびて。御几帳ども取差出して立隠し。中門をさして人を拂けれども。極めて顕露なり。四五度ばかり打奉りて。投入々々祈られければ。本の如く内に投入れけり。

元亨釈書にも。下に引く如く。神の投出さる由云へり。但し此は佛法の異術にて。餘慶僧正と云し人も。此法を行へり。

其ハ古事談に。文範民部卿の。餘慶僧正を。貴妃驗者として。人の妻を犯さんかりと云はれけるを。僧正此由を聞て。忽に民部卿の許に渡られにけり。主其心を得て。所勞の由云て會ざりければ。僧正大事ある事。自聞えむと有ければ。出ざりける時に。然らば投出せと加持せられければ。屏風の上より投出して。惑ひむく死ける時。僧正さおそとて帰られけり。民部卿ハ。三日許死するやうにて。悩み臥されけり。是に因て。子ども二人を僧正に奉りて。免されて命生にけりと有り。大かた世に驗者と稱ながら僧らは。かゝる幻術を用ひて。異驗を見せけるなりけり。此事ハ。十訓抄にも記せるを。校合せて擧たり。〇校者等云く。此民部卿の言に。餘慶僧正を驗者と云ひて。人の妻を犯さんかと云はれたるを思へば。其頃の僧徒の。驗德々々と聞ゆる者は。其に事託せて。婬事を行ふが多かる故なり。然云はれたる事ぞと思はる。抑これ僧正に。さる事有りや無しや知らねど。此前後に擧られたる。名僧大德と聞えし。法師等の事を思ふにも。世に語り傳へざる濫行の。殊に多有けむこと。推量られたり。但し彼善珠僧正の如き。正しく孽子と知れたらむは。然ても有なむ。若も其事の知れざらむには。人の血統をも亂るが多く。重き枉事なるを。世の人々。僧とし云へば。老少を云はず。女の

馴近づくを忌はしとも思はざるは。深く彼道に誑惑せられたるが故なり。返す〲異しき験徳なりかし。偖此民部卿。この事に心著れたる條も然る事なれど。元より學力薄く。其魂の居て固からざる故に。妖僧の幻術に。屏風の上より投出され。三日が程辛き目見らし。剰さへ己が罪とや思はれけむ。子等二人を法師に成て。其由を謝されたる事と聞ゆるは。いとも怯く。片腹痛き事にこそ。

其後和尚罷て出るを。しばし候へと止むれども。久しく立て腰痛く候とて。耳にも聞入ずぞ出ぬ。女御も投入られて後。物氣さめて。御心地さはやかに成給ひぬ。験徳新なりとて。僧都に任ずべき由なれ。宣下せられたれども。箇様のかくさぬ。何條僧綱に成べきぞとて。返し奉ると有り。

染殿后の。眞濟僧正の霊に。悩され給ひし事を。下に擧る如く。諸書に見られど。金剛山の聖人の霊に。嬈乱せられ給ひし事は。今昔物語より外に所見なし。爰に元亨釈書なる。相應和尚傳を考ふるに。天安二年藤妃名多賀幾子。良相女。嬰狂病。万方不愈。藤公延應。應入宮。妃隔屏而臥。應持呪。不久神擲妃於屏外。飛而至應前。擧聲叫呼。應曰可還本所。妃騰飛入帳中。頃刻霊託妃陳謝。狂病速息。貞観三年藤妃又病。藤公又召應。應加之。便愈。藤公大悦。與巴子國寶劔。是從唐國所送。特

爲奇寶者也と有り。是正に宇治拾遺の事實に同じければ染殿后の事は。此後の事として別に記せり。然れど今昔物語。宇治拾遺に。染殿后と有るは。良相公の御女多賀幾子の事を。事實の似たる故に誤れるなり。相應は慈覺大師の弟子なるが。良相公に代りて。剃髪せる僧にて。其薙染の時に。師告て藤公索度者是汝良縁之相應也。今名汝以相應蓋取藤公一字也とて。負する由なれど。旁く由ある事なり。天安二年は此年の八月に。文德天皇崩御ありしが。其前後に。染殿后の悩み坐る状。國史にも見えねば。多賀幾子は女御に御ければ。元より其事の見えざる。然るべき事なり。

釋眞濟は僧正なるに。染殿后に想を懸て。妖魅となりて悩まし奉りし。其は古事談に。貞觀七年のころ。染殿大后天狗の為に悩され。稍數月を經るに。諸有驗の僧侶。あへて能く此を降し者なし。

染殿皇后は。文德天皇の御后。清和天皇の御母に坐まし。御名は明子と申し。大政大臣良房公の御女なり。染殿は處名にて。正親町の南。京極の西に在り。便良房公の家なりと。拾芥抄に見えたりければ。此事元亨釈書を始め諸書に。寛平五年の事とせり。孰か是なる事を知らず。

天狗放言して云く。三世の諸佛の出現に非ずは。誰か我を降

さむと爰に相應和尚召に應じて參入し。兩三日祗候なれども。其驗有なかりし。本山に還り。無動寺の不動明王に對し奉り。事由を啓白して愁懐祈請なしける時明王背きて西に向ふ。和尚隨ひて西に坐す。明王また背きて東に向ふ。和尚また東に坐す。明王忽に背きて南に向ふ。和尚また南に坐して。涙を流し合掌稽首して云く。相應明王を戴き奉る。更に他念なし。而るに今何の過を犯せる事有てかく相背き給ふぞと。明王の本誓を念じて眼を合せる間に。

不動明王の本誓とは。其一に。見我身者發菩提心。聞我名者斷惑修善。聽我説者得大智慧。知我心者即身成佛。其二に。一名持秘密呪生々而加護奉仕修行者猶如薄伽梵と有り。此事谷響集にも見えたり。

夢にも非ず覺るにも非ず。明王示して云く。我生々加護の本誓によりて去りし紀事なり。今顕りて其本縁を説む。昔に紀僧正眞濟存生のとき。我が明呪を持せし。今の汝が如し。而るに邪執を起して天狗道に隨し。本修の功力によりて。皇后を逼惱まれ。我また本誓の爲に彼天狗を護る故に汝に背く。我が呪を持せし彼此同朋なるが故に。彼天狗を縛し難し。然れども汝堅誠なる故に。我已にこれを得ず。汝に秘方を示さむ。汝宮掖に至らは密に彼靈に語れ。你は眞濟の靈に非ずやと。彼此を聞

かば必頭を低て恥澁らふ爾時に大威徳の明呪をもて加持
せむ。かゝれば必降伏を得む。我まづ彼邪心を回して正道に入
らしめむと。
宇治拾遺物語に。叡山無動寺の相應和尚は。比良山の西に。
葛川の三瀧といふ處にも。通ひて行ひけり。其瀧にて不動
尊に云けらく。我を負て都卒の内院。弥勒菩薩の許に將行給
へと。強に申ければ。極めて難き事なれども。強て申すとなれ
ば將行べし。其尻を洗へと云ければ。瀧の尻にて水浴み。
尻よく洗ひて。明王の頭にのりて。都卒天に昇りけり。爰に
内院の額に。妙法蓮華と書たり。明王云く。是へ參入の者

は。此經を誦して入る。誦せざれば入らずと云ければ。遥に見
上げて相應云く。我本の經を讀み。讀めども誦すること未
叶はんと云ければ。明王にても口惜き事なり。其義ならば參
入叶ふべからず。帰りて法華經を誦してのち參るべしとぞ。
搔負て葛川へ帰りければ。相應泣悲むこと限なし。かくて本
尊の前にて經を誦してのち。本意を遂けるとなむ。其不動
尊今に無動寺にあり。等身の像なりと有り。釈書にも此像
は貞觀五年の比。相應が等身の長に自刻せる由いへり。深
殿后の御祈せし時に。彼方此方に向ける像。やがて其なる
ほし。太后の釋魔の憑託ありける故に然る異驗の有しは

よ。不動と云ども。その陀羅尼秘密法に。毘盧遮那佛之化身と
云ひ。大威徳明王と云は。阿弥陀佛の化現なる由。眞言の書
どもに見えざるが。此二佛共に元より有名無實なれども。其
像に憑物なくては斯る異驗の有べくも非ざれバ。若くは
相應が心と。かゝる事の有しと。妄話せるも知べからねど。法
師の然る妄説ハ。珍有ねばれ。
相應和尚これ告を得て。感涙に堪ず。頭面接足禮拜恭敬して。
後日に召うよりて復參り。明王の教誡の旨に任せて。加持し
奉る間に。天狗を結縛せり。今より已後まゝこ來ざらずと歸
伏のよち。此者解脱しられぬ。后は尋常に復し給へりと有り。

眞濟が事と。清和天皇紀貞觀二年二月二十五日の下に。僧
正傳燈大法師位眞濟卒。俗姓紀氏。朝臣左京人也。父巡察彈正
正六位御園。眞濟少年出家。學大乘道。兼通外傳。夙有識悟。從
空海僧都受眞言教。師監其器量。特加提誘。遂授兩部大法。爲
傳法阿闍梨。時年二十五。時人奇之。眞濟入愛當護山高尾峯。
不出十二年云々。天安二年八月。文德天皇寢病。眞濟侍看病。
大漸之夕時論嗷々。眞濟失志隱居。遷化時六十一と見え。釈
書に。眞濟卿了。惟喬親王と惟仁親王と。位定めの時。眞濟
は惟喬親王の驗者を承り。慧亮法師は。惟仁親王の驗者と
成て。驗を抗るに勝ずて。惟仁親王儲君と成給へり。清和

天皇是なり。さて貞濟大に志を失ひ。また文徳天皇の看病に驗れきに依て。倍〻志を失ひて。隱居せる由を記し。また贊曰て。貞濟色に惑ひて魅と成しとは。彼不平の時に當りて偸に皇后の美色を眼て。所守を失ひゐるかと云へり。然るに本朝高僧傳に極めたる貞濟が魔と成ると云る。世に浮說ある由を辨へられど。此後延喜十一年の頃。玄昭と云る僧の。亭子院にて修法のとき。貞濟が靈鵲と成て來れるを。玄昭捕へて爐に投じて燒るに。また怨を結びて。異しき小僧に化して。空より降來る。玄昭法師此を見て。心身惱亂しけるを。淨藏法師が加持して。彼靈を降伏せるよしと。

淨藏が傳に見え。源平盛衰記なる。住吉を名乘れる物の言にも。柿本紀僧正大法慢を起して。大天狗と成れり。是を愛宕山の太郎坊と申すと云ひ。雲景が未來記にも。愛宕山に集ひて。世を亂さむを計れる天狗の中に。太郎坊とて貞濟もありて。是をもて神社考に。柿本紀僧正入高尾峯起大慢心為太郎坊とは記されし成べし。然るを澄圓僧が神社考志評論にて。此を辨じて。既明王曰。回彼邪心令入正道。若爾貞濟墮鬼趣得道者也と云れども。玄昭法師が修法の處に至れるは。是より遙後なるを如何せむ。不動明王の彼邪心を回して。正道に入しめむと云りとも。其を賴がたし。然るは

其謂ゆる正道やぶて釋魔の正道なる故に猶妖魅を脱ざば其も此後にも依然として天狗の列に有を以て知べし。釋淨藏も世に大德貴所など稱れし人に近江介中興が娘に奸して眞弟子を生み。

今昔物語集大和物語などに近江介平中興と云人有けり。家豐にして子共數有ける中に一人の娘有けり。年いまだ若くて形美麗に髮長く有樣微妙かりければ父母此を悲び愛して目を放つ事もなくて養ける程に兵部卿宮など申ける人止事なき御子また上達部など數夜這ければども娘高くて從ざば父母も天皇に奉らむなど思ひて聟取をも為せずて傅る人に此娘物氣に煩ひて日來に成ければ父母此を歎き旁に付て祈禱共を為せけれども其驗も無かりければ思ひ繚ける時に其頃淨藏大德といふ止事なき有驗の僧有けり。實に驗德新たなること佛の如くなりければ世擧て此を貴ぶこと限なし。近江介此淨藏を以て娘の病を加持させむなど思ひて搆へて呼ければ淨藏行にけり。介喜びて加持させける時に即物氣顕はれて病止にけれど暫くは此て御まして祈らせ給へと父母強に云ければ淨藏言ふに隨ひて暫く有ける程に此娘を淨藏見てける時に忽に愛欲の心發りて更に他事不思りけり。また娘も其氣色を心

得ざりける。然て日來が經る程に。何なる隙か有けむ。遂に會にけり。其後此事隱すと為れど。自然人粗知にければ。世にも聞えにけり。然れば世ノ人此事を云繚けるを。淨藏聞て。恥て其家にも行かず成にけるが。我かゝる名を取てり。今は世にも有らじと云て。跡を暗まして失にけり。悔有けるにや。其後鞍馬ノ山と云處に。深く篭居て絶ず行ひけるに。前生の機縁や深かりけむ。常に彼娘の有狀の思ひ出られて。心に懸けり。戀しく思ひけれど。行ひ空もなくて耳有ける程に。打臥たりけるが。起上て見れば。傍に文有り。弟子の法師の一人副有けるに。此を何ぞの文ぞと問ければ。知らぬ由を答へければ。淨藏文を取て披き見るに。我が思ふ人の手にて有けり。奇異と思ひて讀めば。かく書たり「墨染の鞍馬ノ山に入る人はたどるたどるも返り來ななむ」と有り。淨藏此を見るに糸怪く。此は誰をもて遣たるならむ。持來べき便もなければ。奇異事かなと思ひて。今は此事止めて。偏に行をせむと思へども。猶愛欲の思ひに勝ずして。其夜忍びて京に出て彼女の家に行て。搆へて然々と云入させたりければ。娘竊に呼入れて會たりけり。然てまた夜の内に鞍馬に返り行にけり。其にれは戀くて。女ノ許に此なむ忍びて云遣ける。「辛くして思ひ忘るゝ戀しさをうたて啼つる鶯の聲」と。其返事

に女。「汝そも君忘れけるかし鶯の啼をきゝてや思出べき。
とよめる有ければ。帰さ浄蔵大とく。「我ゆゑにつらき人をば
置ながら。何の罪なき世をば恨らむ」とも云ひ遣りて。此様
に云ひ通ひけると。度々に成りければ。此事皆世に聞えけり。
然れば此娘をば。近江介限なく傅きて。女御に奉らむと思
けれども。此く聞えなりければ。親も知らずして。遂に見えず成
なりて。此は女の心の極めて憎き所也。浄蔵心を盡して云
とも女用ざらむには叶べからず。然れば心から女の身を。
徒に成れる也とぞ。世人云ひ繚れると見え。帰さ發心集に。
彼浄蔵は。日本第三の行人なれども。近江守永世が女に契

を結べり。久米仙人は通を得て。空を飛ありきけれど。下衆
女の物洗ひける。脛の白かりけるに欲を發して。仙を退し
て只人となりにけり。今世にも。手足の皮を剥ぎ。指を燈し
爪を砕き。様々の片輪をなして。佛道を行ふ人は。其發心の
程こそ隠無れど。妻子を設くる例多かりとも有り。浄蔵は。
三善清行第八の子にて。元亨釈書に。母夢天人入臥内而娠。
生聰明無雙。七歳求出家と有て。いと弱よりて。不測に法験有り
て。延喜の御世の頃に。活佛の如く稱れけるに此の如し。今
昔物語に。此は女の心の極めて憎き由云けれど。女の心は
誘ひて後にこそ。男よりは深けれ。何に思へども。大方は言ひ

出でては思ひ惑ふを男こそ。然しも深くは思はぬ物から。假令の如くも誘ひ試るぞ常なる。然れど浄蔵こそ憎けれ。さるは常に讀む法華經にても。女は盡く勿親近といひ。まして為法猶不親厚。況や復餘事どもも有をや。凡て此物語に限らず。當時の習ひとて。何の書にも。僧の行状をは。悪しき事をも。悪からぬ様に論る事いと多かりし。心して見べきなり。然は有れど。此も元より人の子なるが。魔縁に引れて。幼より釈子と成されど。取外して人道の戀路に迷ひぬるは宜なる事なりかし。思ふは。極めて憎しとも思はざれ。此は此人のみならず。女が心を惑はしける僧は。多くて然にこそ。謾に釈氏の法のみ執りて議すべからず。有験の名高き僧も。色に本心を乱せしといへども。本心を露せしとこそ云はれけれ。なほ大和物語。後撰集などに。此女親のなくなりて後に。男と共に他國にはかなくて住けるを哀がりて。平兼盛「をちこちの人目まれなる山ざとに家居せむとは思ひきや君」と詠て遣りしかど。返事もせで。よゝとぞ泣けるとも有り。發心集に。近江守永世が女とはなし。今昔物語。大和物語などぞ。近江介中興が娘とあるを。誤れるなるべし。

釋道命は。阿闍梨として。誦經第一と世に稱せられ。其験炳然き人なるに。和泉式部に深く睦び。

道命阿闍梨は。傳大納言道綱の子にて。天台座主慈恵大僧
正の弟子なりし。幼よりて山に登りて法花經を受持す。初めは
一年に一巻を誦して。八年より一部を誦し畢ぬ。音微妙にし
て曲を加へず。音韻を致さずと云へども。聞人耳を傾けて。
讃歎せずと云ふと無りしぞ。然れど色に耽る僧にて。和
泉式部に通けり。宇治拾遺物語。古事談。東齋隨筆などに。道
命或時。式部がり行て臥たりけるに。目覺て經を心を澄し
て讀けるに。八巻讀はてゝ。曉に眠まむと為る程に。人の氣
はひの為ければ。彼は誰ぞと問ければ。己は五條西洞院の
邊に候ふ翁なりと答へければ。道命こは何事か侍ると云へ

ば。今宵此御經を承給はりぬる事。生て世々忘がたく侍る
也と云ければ。道命法花經を讀ことは常の事なり。など今宵
しも言ふぞと云へば。五條の齋云く。清くて讀參らせ給
ふ時は。梵天帝釈を始め。聽聞し給へば。翁などは近く參り
て承給はる事能はず。今宵は御行水も候はで。讀奉らせ給
へば。梵天帝釈も御聽聞候はぬ隙にて。翁參り寄りて承給
はりて候ひぬる事の。忘がたく候也と云けるとも有り。又古
今著聞集に。道命阿闍梨と。和泉式部也。一ッ車にてものへ行
けるに。道命後むきて居たりけるを。和泉式部などかくは
居たるぞと云ければ。よしやよし昔やむかしいがぐりの。

ゑみも合はざれはちをさそは止」とも有り。さて五條の齋とは。謂ゆる五條の道祖神なり。此は眞の塞神にはあらで。後世に祭れる。漢土は卑き鬼なる故に。佛法を貴べる妄語をぞ放ちたるなり。斯る事よりや言出けむ。今昔物語集に。此僧法輪寺は禮堂に籠りて。經を讀けるに。一老僧も共に籠けるが。其夢に。金峯山の藏王。熊野權現。住吉神。松尾神など寄りて。道命が讀經を聞給ふと見ける由を記し。法花驗記には。殊に妄説を加へて。住吉明神向松尾明神言聞此經時離生々業苦善根增長仍每夜所參也。松尾明神言。我有近所不論晝夜常來聽經。如是稱讚礼拜阿闍梨などいへり。驗記は。今昔物語を取て記せる記なるに。本書に見えざる妄語を加へたるなり。此字もて法師の記せる書には。殊に妄説多き事を知べし。然るに今昔物語に。或女に託ける霊。道命が讀經を聞て。悪道を免れて。天上に生るゝ由を云へる事あり。其は佛法を信ぜる。愚人の霊は常なれど。怪むに足らず。さて此法師の死後に。或人は夢に。大なる池の中に。經を誦する聲あるを。吉聞けば道命が音なり。池中を見るに。彼阿闍梨船に乗て來て云く。我生ける時に禁戒を持けば。天王寺別當の時に。佛物を用ひたる罪に依て。此池に住む。兩三年を逕ば。罪苦を畢て。都率天に生るべしと云へりと有るは。僧の霊は

常言なれども。怪むに足らず。然れど天上の果は覺束なし。

釋朝勸は。志賀寺の上人も聞えたる如く。京極御息所に想を懸て。ゆらぐ玉緒の古歌を詠じ。

寶物集に。京極御息所と申けるは。左大臣時平公の御女なり。延喜の女御にて參り給ふ夜。寛平法皇の。出立見むとて。御幸して見給ひけるに。御心に著給ひければ。老法師に給はせぬとて。押取給へる人の御事なり。此御息所志賀寺へ詣で給けるを。寺の聖人見奉て。次日彼御息所の御許に參り。對面し給へてけるを悦びて。御手をとりて詠侍ける。「初春の初子の今日の玉箒。手に執からにゆらぐ玉の緒」と詠えて今生の行業を譲り奉ると云へりと見え。盛衰記に。京極御息所。志賀寺詣のとき。彼寺の上人心を懸奉て。今生の行業を譲り奉らむよし申せば。「よしさらば眞の道のしるべして。我をいざなへゆらぐ玉の緒」と打詠め給ひて。御手を授け給ひけりと有て。上人の詠たる歌は。万葉集に中納言家持卿の。正月初子の日に。玉箒を賜はりける時に。讀出られし古歌なるを。詠出たるなり。宇治大納言物語に。寛平御門出家して。忌じう行はせ給ひければ。天狗の招き參らせて。京極の御息所にわたし參らせけるとなり。

釋善祐は。粟田口僧正と聞えたる如く。二條后に密通し。

王代一覧に。寛平八年に。二條后高子。五十六才にて。東光寺の善祐と密通有し故て。后は位を落され。善祐を伊豆國に流さるゝ事有て。拾遺集に。善祐法師流されける時。母の云遣しける。「なく涙世はみな海と成なゝむ。同じなぎさに流れよるべく」。井澤長秀云。伊豆國熱海に。紀僧正が墓ならびに。僧正が植し都松とて有り。土俗云く。紀僧正が。手づから植し松なり。都をこひし歎く故て。此松も枝悉く都に向ふ故に。都松といふ。又は深殿松とも云ぞいへて。按ふて善祐法師が墓を。紀僧正と誤り傳へたるならん。